

2021年8月8日（日）主日朝礼拝説教

『過ぎた年月を』 井上隆晶牧師
ヨブ記 29章 1～11節、マタイ 10章 26～31節

①【人生を見事に詠った文章】

私は今までヨブ記をあまり読みませんでした。それは文章が長く、意味がよく分からず、途中で読むのが嫌になってしまったからです。今回聖書朗読予定表に従って改めて読み、世界中で読まれているだけあって本当に素晴らしい文学だと思いました。まず文章が美しいのと、人間の心の底にある苦しみを見事に表現しています。今日の個所では、ヨブは過ぎ去った昔の日々を思い出して、神様に訴えています。

「どうか、過ぎた年月を返してくれ、神に守られていたあの日々を。あのころ、神はわたしの頭上に灯を輝かせ、その光に導かれてわたしは暗黒の中を歩いた。神との親しい交わりがわたしの家であり、わたしは繁栄の日々を送っていた。あのころ、全能者はわたしと共におられ、わたしの子らはわたしの周りにいた。」

（ヨブ 1：2～5）ヨブは昔は神に守られており、神と親しく交わり、神は私と共にいて下さったとあります。6節を見ると乳脂（バターやチーズ）もオリーブ油も豊かで溢れていたとあります。7節以降では、ヨブが町の広場に行けば、老人も若者も黙り、彼に敬意を払いました。ヨブの事を聞いた耳は祝福し、彼を見た目は賞賛します。「見て、見てヨブ様だわ、ヨブ様を見れたわ」と騒がれたということです。ヨブはみなし子を助け、貧しい人を守り、正義を行い、すべての人を公平に扱い、障がい者を援助し、訴訟を起こされている人を助け、奴隷となった人を買戻したとあります。なかなかできるものではありません。まさに義人、聖人です。18節を見ると「わたしはこう思っていた。わたしは家族に囲まれて死ぬ。」とあります。自分は正しく生きたのだから長生きをし、最後まで生き生きとして、家族に囲まれて幸せに死ぬと思っていたというのです。25節では「わたしは嘆く人を慰め、…道を示してやり、首長の座を占め、軍勢の中の王のような人物だった。」とあり、自分はいつも立派な指導者であったと昔を懐かしんでいます。これを読むと私は18世紀のザドンスクの聖ティーホンの「流れゆく川」という題の説教を思い出します。

●流れゆく水の有様は私たちの人生と、その中で生じる一切のものの有様でもある。…私は幼児だったが、これも通りすぎていった。私は少年であったが、これも過ぎ去った。私は青年であったが、これも私から去った。私は成年で強健な男であったが、私はもはやそうではない。今私の髪は白く、そして老齢のために衰えているが、これも過ぎ去ってゆく。私は私の終末に近づき、すべての肉体あるものにふさわしく死んでゆく。…私の身に起こったことは誰にでも起きる。私は健康だったり、病気だったり、また元気になったり、病気になった。それもいっさい通りすぎた。私は幸せだったり、不幸だったりした。時は過ぎ去り、それと共に何もかも消

え去った。私は榮譽を受けた。私から榮譽も過ぎ去る時がやって来た。人は私を賞賛し、尊敬した。時が過ぎ、私はもはやこのようなことには出会う。…賞賛と非難、栄光と不名誉、そのいっさいが通りすぎた。世の中とはそのようなものである。…何もかも時と共に消える。私たちの過去が夢のように、それと共に私たちのいっさいの昔の幸せが夢のように見える。…

よく似ています。人生のすべての幸せが過ぎ去っていったとヨブも聖ティエホンも思い出しているのです。

②【神は共にいてくださる】

ヨブの問題点とはどこにあるのでしょうか。「あゝ」という言葉が二回繰り返されています。「あゝ、全能者はわたしと共におられた」（5節）ということは、「今は共におられない」ということになります。2節で「神に守られていたあゝの日々を返してくれ」といっているということは、「今は守られていない」ということになります。つまり彼は今、神が見えなくなっているのです。良い時には神は共にいて下さると思ひ、嫌なことが起こると神は自分から去ったと思うのが人間なのではないのでしょうか。では本当に神はヨブと共におられないのでしょうか。神はヨブを守っておられないのでしょうか。神はサタンがヨブに災いを下そうとした時、いつも「よろしい、ただし…をするな」と条件をつけて彼を守っています。旧約時代、敵に責められたユダの王アハズに対して神は預言者イザヤを遣わしこう言われました。「落ち着いて静かにしていなさい。恐れることはない。」（イザヤ 7：4）そして神は「何かしるしを求めよ」と勧めますが、アハズは「こんな緊急事態の時に神など信じてられない、しるしなど求めない」といいます。そこで神は一方的にしるしを与えます。それが「見よ、おとめが身ごもって男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」（イザヤ 7：14）というものでした。これが実現したのがイエス様の降誕です。神は人が信じようとしなくても、民の元に来てくださり、とどまり、共にいて下さいます。神は誠実なお方、約束を破られるような方ではありません。キリストは「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28：20）と約束をされました。だから今も、この世に共にいてくださり、私たちと共にいて下さいます。神は誠実ですが、人間は不誠実です。神は共にいますが、共にいないのは実は人間の方なのではないのでしょうか。神は共にいないと思って神を疑い、神から離れていくのです。

●2世紀に小アジアの（今のトルコ）スミルナという町にポリュカルポスという人がいました。使徒ヨハネの直弟子でした。当時はキリスト教は迫害されていて、彼は80歳ほどになって捕まり、信仰を捨てるように言われます。彼はとても人徳のある人で、市民にも好かれていました。総督は何とか彼を生かそうと努力しています。「一言でいい、キリストを拒否するだけだ」しかし彼は言います。「どんな人でも悪い方から良い方になるのは良いことですが、良い方から悪い方に傾いて行くのは良くないことです。自分の80年の生涯の間、キリストは私と共におられ、何一つ私に悪いことをされたことはありません。信仰を捨てるわけには

まいりません」そこでポリュカルポスは火あぶりの刑になって殉教したのです。

自分が殉教するというたいへんな苦難の中にあっても、彼は神は私と共にいてくださったと告白しました。神が共にいてくれるかどうかを、周りの状況から判断してはなりません。神の言葉、神の約束から判断するのです。聖餐式は神が共にいてくださるしるしです。しかもパンとぶどう酒の形であなたの中に入り、あなたの肉と血と一体になって共にいてくださいます。

③【過去を振り返って感謝し、未来に希望を持つ】

「昔は良かったな」と言い出したら歳をとった証拠だと言われます。過去を思い出すなど言っているではありません。過去をただ懐かしみ、「昔は良かったな」だけで終わってはならないのです。「昔は良かったな」ということは「今は良くない」ということでしょう。私たちが過去を振り返るのは、同じ過ちを繰り返さないように過去から学ぶためであり、また過去から今日の日に至るまで、神からいただいた恵みを思い出し、いかに自分が今日まで神に守られ、愛されて生きてきたかを思い出し、神に感謝するためなのです。つまり自分の過去から神を見つけるのです。ティーホンとヨブの違いはここにあります。ティーホンは先ほどの説教の最後をこのような言葉で終わっています。

●神のみ言葉や、私たちの信仰が、私たちに確信させてくれる来世の生活は全く異なるものとなろう。そこではいったん始まった私たちの生活は決して終わることはない。私たちの命は絶えることなく、不変である。私たちの肉体は病気、老い、死や腐敗から自由になるであろう。私たちの肉体は霊的に不変、不滅に、強健に、軽やかに、盛んになるであろう。同様に栄光、名誉、休息、平和、慰め、喜び、晴れやかさ、いっさいの至福が永久にそこにあるだろう。

ティーホンは過去を振り返ると共に、未来を見て希望を抱いているということなのです。

●水野源三さんという人がいました。彼は9歳の時に赤痢にかかり、高熱によって脳性麻痺を起こし目と耳の機能の他すべての機能を失いました。12歳でクリスチャンになり、47歳で召されるまで、詩を書きました。母親が何とか彼と意思の疎通をしようと五十音順を指で指し示したら、目の動きで応答したのです。これが彼の唯一のコミュニケーション能力となり「瞬きの詩人」と呼ばれるようになりました。こんな詩があります。

「新聞のにおいに朝を感じ 冷たい水のうまさに夏を感じ
風鈴の音の涼しさに夕暮れを感じ かえるの声 はっきりして夜を感じ、
一つのこと、一つのこと に 神様の恵みと愛を感じて。」

彼のすばらしいところは、どんな時にも神様の恵みが見えているということです。

コロナ感染症が世界的大流行を起こし、私たちの世界は完全に止まってしまいました。元の世界に帰りたいと願ってもどうにもなりません。コロナも神の計画の

中にあります。世界は崩壊に向かって進んでいるのではなく、完成に向かって進んでいるのです。目の前の状況がどんなに悪く見えても、それに惑わされてはいけません。神は今も共におられます。ヨブは理由の分からない苦難を通過して神と出会いました。この苦難がなければ神を深く知ることはできなかったと思います。苦難が無ければ見えないことがあるのです。苦難は私たちの信仰を目覚めさせ、目の覆いを取り除き、神の愛と人の愛を見えるようにしてくれます。元に戻ることを考えるのではなく、前に向かって前進しましょう。

●鈴木正久という教団総会議長をされた牧師がいました。戦後教団戦責告白を出した議長として有名です。彼がこんなことを書いています。「私は今、私のこの世の生活の終わりに立っています。それというのも肝臓がんだからです。自分のこの世の生涯がこのようにして終わるとは、実は考えたことはありませんでした。しかし今は、このことについても『神のなされることは皆その時にかなって美しい』（伝道3：11）ことを覚え、私の生活の頂点として、主とその御国をこのように深く真剣に思う時を与えられる恵みに感謝しております。主の光と慰めと力が、日々新たに私を支えて下さり、死を待つのではなく『キリストの日』に向かって生きてゆく導きを与えて下さいます。」

神様は病をもって人の高ぶりを取り除いて謙虚にし、神にあって強く生き、神を崇める生活をさせてくださいます。

私は神が私の中に造られた良い物を信じます。また私は神が私とこの世にしてくださった素晴らしい業と約束を信じます。神から出たものを私は信じます。それだけが最後まで残るからです。私から出たものは消え去っても良いのです。周りの状況がどんなに悪くても、どんなに変わってしまっても、決して変わらず、決してなくなる神様の恵みをいつも見える者となりましょう。